



開港当初、外国への輸出茶の割合は伊勢茶が最も多かった

員となり、後に神奈川県議員、貴族院議員を歴任するなど政治の世界でも活躍の場を広げていた。そんな中、1898年に米西戦争が起こり、アメリカは財源保護のため、日本茶に厳しい関税を課した。撤廃運動も効果がなく、56歳となっていた大谷嘉兵衛は関税撤廃のため渡米し、マッキンレー大統領に直接会って茶関税の撤廃を陳情する。これにより、4年後には関税が撤廃され、日本茶の輸出はさらに進んでいくことになる。

「嘉兵衛はお茶を全国で買いつけたのですが、特に伊勢茶の仕入れを優先的に行うことで、三重県の茶を、大生産地へと育てあげたのです。」
ふるさとをこよなく愛した嘉兵衛
資料館でその人生を振り返る



嘉兵衛の郷土愛の強さを物語るエピソードを堀井さんはいくつも紹介してくれました。
「当時、柳田川には低い丸木の橋があるので、大雨のたびに増水した水で橋が落ちてしまうのです。嘉兵衛は橋の建造費にかかる大部分を出資、明治29年に高架の橋が完成しました。この橋は「大谷橋」と命名されたのですが、豪雨によって何度も橋は流出し、今残る大谷橋は4代目です。他にも川俣第一尋常小学校の校舎新築や大口港の整備に尽力した。統合によって廃校となり、ひっそりとした川俣小学校の校舎の一角に、手づくりの資料館が作られていた。普段は閉めています。希望者があれば案内してあります。小学校の社会見学で利用されることもありますよ。」

「嘉兵衛が育った柳田川流域は、お茶、椎茸、杉や鮎などの香りの良い特産物が多かったことから香肌（かほだ）峡と呼ばれていました。このあたりは寒暖の差が大きく、山の傾斜地で水はけが良いこと、年間の平均気温が14〜15度と温暖だということ、お茶の栽培に適した場所だったんですね。」



「茶王 大谷嘉兵衛の会」事務局長・堀井宏憲さん

「嘉兵衛が育った柳田川流域は、お茶、椎茸、杉や鮎などの香りの良い特産物が多かったことから香肌（かほだ）峡と呼ばれていました。このあたりは寒暖の差が大きく、山の傾斜地で水はけが良いこと、年間の平均気温が14〜15度と温暖だということ、お茶の栽培に適した場所だったんですね。」



カラフルな輸出用日本茶のポスター



礼服や手紙、写真など多くの資料が展示されている



茶樽箱などお茶に関する道具も展示 レトロなお茶を量る秤

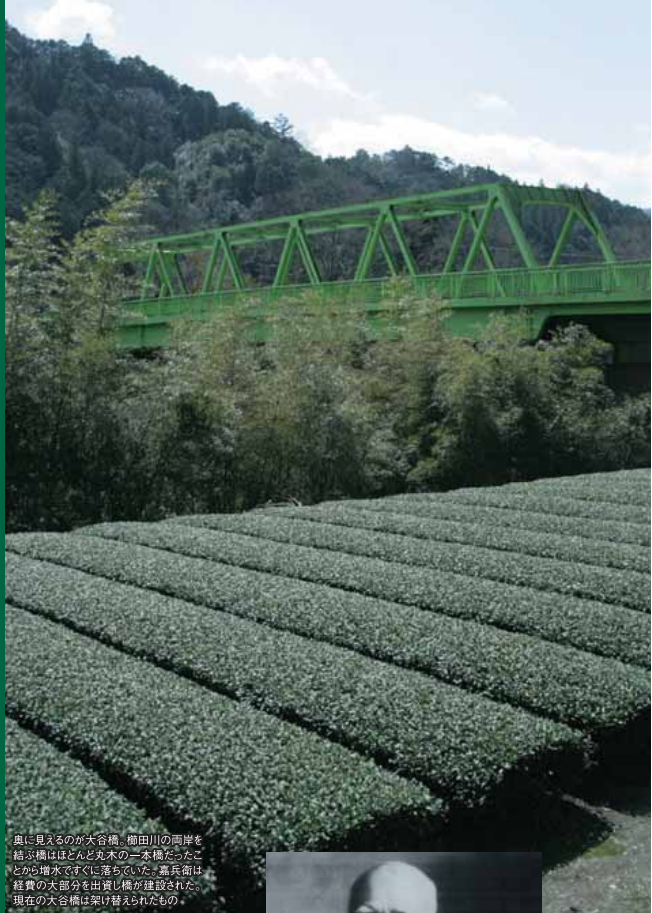
【Info】
大谷嘉兵衛資料館見学の申し込み
「茶王 大谷嘉兵衛の会」
TEL0598-45-0114
※ 見学希望の場合は、事前に電話で申し込みを。見学無料
「茶王 大谷嘉兵衛の会」では、毎年11月に「大谷嘉兵衛まつり」を行っている。お茶の手もみ体験やお茶の入れ方教室などが、来場者には卒業がふるまわれる。

巻頭特集

日本茶に人生を捧げた郷土の偉人

茶聖・大谷嘉兵衛

お茶といえば静岡と連想されるように、全国の生産量の40%を占めている。古くは鹿児島県、そして三重県が生産量は全国第3位なのだが、明治の始め頃に伊勢茶が全国1位の出荷量を誇っていたことはあまり知られていない。
和歌山街道の宿場・七日和と柳田川をはさんで対岸にあるのが谷野の里。現在の飯高町宮野。この地に生まれた大谷嘉兵衛が、なぜ「伊勢茶の祖」または「茶聖」と呼ばれるようになったのか。齢90年のその人生をひも解いていく。



奥に見えるのが大谷橋。柳田川の兩岸を結ぶ橋はほとんど丸木の本橋だったことから増水ですぐに落ちていた。嘉兵衛は経費の大部分を出資し橋が建設された。現在の大谷橋は架け替えられたもの。



明治から昭和にかけて日本茶の発展に尽くした大谷嘉兵衛

奉公で出会った輸出品としての日本茶がその後の人生を変えた

大谷嘉兵衛が生まれたのは170年ほど前、長い鎖国を経て明治の世が来るまであと20数年といった時代のこと。幕末の日本では、国力の増強を目指し、輸出の振興が図られていた。当時、一番多く輸出されていたのが生糸で次がお茶だった。日本茶は、日本で消費されるというよりも、海外の重要な輸出品だったのだ。
「嘉兵衛は19歳のとき、隣村の森出身だった小倉藤兵衛を頼って、横浜の「伊勢屋」へ奉公に出ます。その頃、日本茶の輸出は年毎に増えていったときで、伊勢屋は製茶貿易をされていました」と話すのは、茶王 大谷嘉兵衛の会」の堀井宏憲さん。

日本茶への厳しい関税にアメリカ大統領へ直談判

1889年、明治24年に横浜で市制が施行され、嘉兵衛は市会議

憲さん。
1867（慶応3）年、24歳だった嘉兵衛は、奉公していた伊勢屋を出て、当時、横浜で製茶輸出の最大大手だったスミス・ペーカー商会で茶の買入方となる。翌年にはわずか3ヶ月で420トンの大量の茶の取引を成功させた。このときに支払った金額は26万8千両で、この取引はスミス・ペーカー商会だけでなく、自身にも大きな富をもたらす。嘉兵衛はこの資金を元手に独立し、横浜に茶の売込商を開いた。
「ところが、明治維新後、お茶の輸出が盛んになればなるほど、粗悪品が出回ってしまったんです。嘉兵衛は同業者と共に「製茶改良会社」をおこし、「茶業共同組合」を設立して品質の向上を図りました。」

とれるお茶は香肌茶と呼ばれ、何度もお茶の品評会で賞をとっています。」

山肌にお茶の畑が広がる美しい故郷、伊勢茶に親しんだ子ども時代を、嘉兵衛は幾度も思い出したことだろう。昭和8年2月3日、嘉兵衛は90歳で亡くなる。現在、大谷家の菩提寺である長楽寺には、大谷嘉兵衛の胸像が建てられている。



菩提寺の長楽寺。長楽寺近くには、大谷嘉兵衛の銅像が建つ